

幕末明治期における学術・教学の形成と漢学

町 泉寿郎

一、はじめに

筆者が所属する二松学舎では、従来、漢学者三島毅（一八三一―一九一九）による開塾（明治十年十月十日）の動機について、「当時の欧化の風潮に抗し、明治の教育制度に批判的な立場から」（『二松学舎百年史』序）という語られ方をすることが多い。「漢学」（宋学に対する漢学ではなく、漢文による学習の意味）が日本の「知」の形成に果たした役割に、基礎学の意味と、中国に関する学知の意味があるとすれば、基礎学としての漢学は十九世紀を通して洋学に席を譲って衰退したと考えられがちであるが、果たしてそのような見方で近代の日本における漢学の役割を説明することができるであろうか。本稿では、幕末明治期の近代化過程における漢学の動向を、人物と学校制度・教育制度に着目することにより、揺籃期の学術・教学の実態の一端をその揺れ動きのままに素描してみたい。

二、幕府から明治新政府への文教機関の継承

江戸時代において儒学が果たした意義を一概に述べることは困難であるが、幕府儒者を例にとれば、その職掌は外交（五山禅林から林家へ）、編纂（法典・家譜・歴史など）、教育に分けられるのではないかと考えている。これらはいわば公的な学問といえる。

そのうち「教育」に関しては、十八世紀後半以降に漸く増加する公立学校、幕府の場合は一七九八〜九九年に直轄化されて昌平坂学問所ができる前後で対象・目的は異なる。江戸時代初期まで漢籍による学習は公家・上級武家・町衆等の一部の支配階級の占有物であったが、十七世紀を通じて木版印刷普及により附訓点の安定した本文が市場に流通し、十七〜十八世紀には大都市を中心に私塾が伸張して、一部の支配階級にとどまらず、経済力をつけた豪農・豪商や医者などの専門職が自主的に学習に向かうようになる。「学び」は江戸時代において基本的には私的な行為であった。昌平坂学問所（および全国諸藩の藩校）の創設と、そこでの朱子学による普通教育の形成は、武士階級を対象とした公的な「学び」が成立したことを意味する。別の視点から言えば、経済的疲弊を深める武士層が支配階級として自らを再建するための施策と考えることもできるだろう。ただし、武士階級の「学び」の成立は、庶民の「学び」を排除するものではなく、むしろ諸藩の学問奨励策は豪農・豪商階級を巻き込む形で行われることも珍しくなかった。したがって、階級的秩序が動揺しない範囲においてという限定つきではあるが、江戸後期にはすでに学問によって立身出世することが可能な時代が到来していたともいえる。¹⁾

昌平坂学問所に限らず、開成所・医学所など幕府文教機関は、明治新政府に接収された後、改変されながら継承されるものが多く、制度的にも人的にも接続面がある。この状況は、諸藩における藩校が明治以降に公立学校に再編されていくことも近似している。また、筆者の所見では、この公立学校の組織化の過程で、次第に初等中等教育と高等教育の教育内容が分化していったのではないかと思う。例えば、いわゆる文久三博士（一八六三年登用、安井息軒・塩谷宕陰・芳野金陵）の

奉じた学問はいずれも寛政年間に形成された正学派朱子学ではなかった。このうち芳野金陵は、多事多難な時勢のため実現こそされなかったが、幕臣子弟の初等教育のために江戸市中に学問所管轄下の「小学」十数を開設することと、本邦諸儒の経書解釈の編纂を、学問所改革案として提案している^②。前者は幕臣子弟の初級教育機関を増設する案であり、その教育内容は正学派朱子学を旨としたと推定される。後者は朱子学系解釈に限定したとは考えられず、金陵が正学派朱子学ではなく自ら奉じた「折衷学」を学問所に持ち込もうとしたものとみなされる。初等教育には正学派朱子学を維持する一方で、その上位にある学問所のより高等な教育は朱子学に拘泥しない、より博い学問をめざした可能性がある。更に言えば、朱子学をベースにした初等中等教育の次の階梯として学ぶ内容は、漢学であれば折衷学・考証学（あるいは陽明学）などがあり得、漢学以外にも国学や洋学を学ぶ者も多かったと見るべきであろう。

ついで、一八六八〜七七年（明治元〜十年）の間、幕府機関に起源をもつ文教機関が新政府に移行した後、高等教育としては「和漢学」と洋学はくつきりと明暗を分けたように見える。幕府教学の中心にあった昌平坂学問所（およびこれに附属されていた和学講談所）は昌平学校（一八六八）↓大学校（一八六九）↓大学（一八六九〜七〇）となったが、洋学と皇漢学の対立が解消されないまま閉鎖され廃止された（一八七一）。また、一七六五年創設の躋寿館を起源とする漢方医学の拠点たる医学館は、お玉が池種痘所（一八五八開設）を起源とする後進の医学所の附属となった。

他方、天文方翻訳局（一八一開設）を起源とする蕃書調所（一八五八）は、開成所（一八六三）↓開成学校（一八六八）↓大学南校（一八七〇）↓南校（一八七〇）↓開成学校（一八七二）↓東京開成学校として存続した。医学所（一八六一開設）は医学校（一八六八）↓大学東校（一八七〇）↓東校（一八七〇）↓第一大学区医学校（一八七二）↓東京医学校（一八七四）として存続した。そして別に工部省管轄下に新設されていた工部大学校（一八七七）と併せて、ともに一八七七年に法・医・工・文・理の五学部で発足する東京大学に統合される。

したがって、この文教機関の組織改編を反映して、一八七二年発布の「学制」の規程では、大学は「高尚ナル諸学ヲ教ル

専門科ノ学校」とあり（つまりこの時点での大学は専門学校に過ぎない）、その専門科とは南校・東校での授業科目である理・化・法・医・数理だけであつて、ここに「文」の学びが公的な高等教育の中から脱落し断絶したことが看取される。

三、高等教育機関（東京大学文学部）における和漢古典学

一八七七年の東京大学における文学部の創設は、一八七一年に廃止された大学本校の復活と見ることができ。これに依りて、一八七九年發布の教育令の規程では「大学校ハ法理学医学文学等ノ専門諸科ヲ授クル所トス」とされている。この時、文学部に開設された学科は、哲学・史学（↓教官に適任者を得ず廃止）・政治学理財学・和漢文学であつたが、一八八〇～八五年の間の四十七人の文学部卒業生のうち、和漢文学科は僅か二名の卒業生（一八八一田中稻城、一八八二棚橋一郎）しか出していない。哲学科も専修した学生は三人（一八八〇有賀長雄、一八八三三宅雄二郎、一八八五井上円了）のみ、一八八一・一八八二年卒業生に見られる哲学兼修学生（例えば井上哲次郎の哲学と政治学の兼修のごとき）が六人、合わせて九人に過ぎない。それ以外の四十七人中、三十六人、約八〇パーセントが政治学理財学科の卒業生である。この政治学理財学科が一八八五年には文学部から法学部に移行し、文学部は再び存亡の危機に瀕したと思われる。

その一方で、この時期は臨時設置された古典講習科（一八八二～八八）が、本科学生を上回る数の生徒を擁した。明治十四年政変後の反動的な論調（井上毅「人心教導意見案」等）を背景に、開設された古典講習科では、国書課前期（定員四十、一八八三～八七）が二十八人、国書課後期（定員四十、一八八二～八六）が二十九人、漢書課前期（定員四十、一八八三～八七）が二十八人、国書課後期（定員三十、一八八四～八八）が十五人、漢書課後期（定員三十、一八八四～八八）が十六人、合わせて八十八人もの卒業生を出した。

古典講習科の各課は東京大学時代に始まったが、卒業は全て帝国大学に改組後のことである。一八八六年の帝国大学改組によつて、「帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス」（帝国大学令）と規定さ

れ、何が明治日本国家に須要な学問であるかが吟味されることになる。この帝国大学設立を契機に、古典講習科の生徒は、官費支給の打切り等による中退者の続出や、学士学位の不交付など本科生との待遇格差が明らかになり、明かに打撃をうけた。

古典講習科に関しては、本来の東京大学の性格（外国語偏重の学校のなかで入学試験に外国語を課さず）とは異なるあくまで臨時的な措置と見る向きもあるが、和漢学の教官たち自身が斯学復活を歓迎して子弟や門生を入学させていることから見れば、開設当初から亜流の課程であったとみることには、やや無理があると感じられる。そもそも帝国大学以前の東京大学とは、第一大学区に設けられた大学校に過ぎず、その実態は先に見た通り理・法・医などの専門学校に他ならず、官吏等の就職に有利な官立学校としては工部大学校・司法省法学校・海軍兵学校・軍士官学校等もあり、東京大学は高等教育機関のうちの一つに過ぎなかった。またその時代の、学生の八〇パーセントを政治学理財学科が占めていた文学部（および法学部）は、政治学理財学科が法学部に移行した後の文学部とは明らかに異質であったはずである。

次に、東京大学法学部・文学部に和漢学を講じた教官について見ておこう。職位の異動を記せば次の通りである。はじめに古典講習科開設以前に任官した者を挙げる。

- 中村正直（漢）：講師（1877文）、教授（1881文）、元老院議官（1886）
- 横山由清（和）：講師（1877法文、1879歿）
- 信夫 粲（漢）：雇（1877文）、御用掛（1884文）、非職（1885）
- 小中村清矩（和）：講師（1878法文）、教授（1882法文）、教授（1886文）
- 三島 毅（漢）：講師（1879文）、教授（1881文）、非職（1886）
- 黒川真頼（和）：講師（1879法文）

- 島田重礼(漢) …… 講師(1879 文)、教授(1881 文)、教授(1886 帝大文科、1898 歿)
 木村正辞(和) …… 講師(1880 法文)、員外教授(1880 法文)、教授(1884 法文)
 大沢清臣(和) …… 准講師(1880 法)
 飯田武郷(和) …… 助教授(1881 法)
 岡松甕谷(漢) …… 御用掛(1882 文・予)、御用掛(1885 文)、非職(1886)

次に、古典講習科開設以後に新たに任命された和漢学の教官は、次の通りである。

- 久米幹文(和) …… 准講師(1882 古)、助教授(1884)、免職・講師嘱託(1886)
 本居豊穎(和) …… 講師(1882 古)、免職(1886)
 小杉楹邨(和) …… 准講師(1882 古)、免職(1886)
 松岡明義(和) …… 准講師(1882 古)
 佐々木弘綱(和) …… 准講師(1882 古)
 物集高見(和) …… 准講師(1883 文)、教授(1886 帝大文科)、1899
 南摩綱紀(漢) …… 教授(1883 文)、免職・講師嘱託(1886～1888)
 佐藤誠実(和) …… 准講師(1883 文)、解職(1884)
 内藤耻叟(和) …… 講師(1884 文)、講師(1885 文)、教授(1886 帝大文科)
 秋月胤永(漢) …… 講師(1884 文・予)、免職(1886)
 大和田建樹(和) …… 准講師(文 1884)、免職(1886)

川田剛（漢） …… 教授（文1884）、免兼職（1886）
 重野安繹（漢） …… 教授（1884文）、免兼職（1886）

一八八六年、東京大学から帝国大学への改組時に、教官のうち残った者と辞した者があった。東京大学法学部・文学部に和漢学を講じた教官のうち、帝国大学改組後もなお教授として留まった者は、法制史の小中村清矩、考証学の島田重礼、水戸史学の内藤耻叟、国文学を講じた物集高見の四人だけで、特に漢学では島田重礼が唯一であった。他に、古典科生徒の在学中に限って、南摩綱紀（宋学に関する知識が期待されたか）と、水戸学の流れを汲む久米幹文が、一年更新の講師を嘱託された。帝国大学への改組に当たり、何が国家に必要な学問であるかが吟味されたと見ることができれば、ここから和漢古典に関する旧学のなかで高等教育の内容として何が選択されたのかを知る材料になりうるはずである。

この時期、島田重礼（一八三八～九八）はどのような学問を講じていたのであろうか。『東京大学年報』「内外教師教授等申報」によれば、一八七九年（明一二）九月～八五年（明一八）七月の時期、法学部・文学部（和漢文学科・哲学科・古典講習科）の学生に漢籍を講義または輪読を行っている。講義科目は「漢文学」「支那哲学」「経学史学」等で、「支那哲学」に『孟子』『老子』『荀子』等の諸子、「漢文学」に『文章軌範』『唐宋八大家文読本』等を用いるなど教材には区別が見られるが、いずれも漢籍を講読または輪読するスタイルである。³⁾

その後、帝国大学に改組された一八八五年九月から一八八六年六月の学年で、島田は初めて書籍を使用しない「講義」を開始した。「申報」に次のように言う。

哲学三年生ニハ本年ヨリ書籍ヲ用キス専ラ口授ヲ以テセリ。先ツ道德仁義等ノ名義ヲ挙テ一々経史ニ徴シ、旁ラ漢魏以来諸儒ノ説ヲ采リ委曲ヲ辨明シ畢テ後、堯舜周公ヨリ孔門諸弟子学派ノ源流、并ニ周末諸子学術ノ異同ヲ演述セリ。

其方先ツ各人ノ履歴ヲ略挙シ、次ニ學術ノ大意ヲ説キ、或ハ書中ノ語ヲ摘テ之ヲ黑板ニ書シ、人々ヲシテ其要旨ノ在ル所ヲ知ラシメタリ（傍線筆者）。

更に「申報」をたどれば、帝大移行後に、島田の授業科目はいわゆる講義科目が確実に増加し、その一方で「漢文学」（講読）や「漢」作文（添削）など他専攻（法学部など）や初学者向けの教養科目が減少している。⁽⁴⁾この島田に比して、中村正直・三島毅を始めとする改組時に辞した教官たちは、主に「漢文学」や「漢」作文の担当者たちであり、この部分が高等教育における和漢古典学から削除された部分と見てよい。

講義形式の授業については、嘱託講師を続けた南摩綱紀がそれを行うに当たって参考書の不足や困惑を述べている文書も残されていて、旧学者たちにとって未知の「講義」を行うことが困難であったことがうかがえる。⁽⁵⁾

四、島田重礼と井上哲次郎の帝国大学における「支那哲学史」講義

改組された帝国大学文科大学では、招聘外国人教師であるリースの史学やチェンバレンの博言学により文系領域の研究法が漸く定着するといわれる。和文学・漢文学でも旧幕時代の国学・漢学から変質し、島田重礼や井上哲次郎（一八五六～一九四四）は従来型の講読とは異なる支那哲学史を講じた。しかも、清朝漢学の影響を受けた大田錦城・海保漁村の学統を承ける島田と、東京大学を卒業した井上とは、同じく「支那哲学史」を掲げててもその内容に開きがあったと予想される。

島田が初めて書籍を使用しないで行った「支那哲学史」の講義は、幸い選科生高嶺三吉が遺した一八八六～一八八七年の聴講ノート『支那哲学史』（金沢大学図書館所蔵）によって知ることができる。但しこの聴講ノートは、講義者を明記しない前半部分と、島田重礼の講義であることを明記している後半部分からなり、講義内容に明らかな違いが認められる。例え

ば、前半部分には次のような記述があつて、西洋の学術との接点を確認できない島田の講義とは考えにくい。

○性論

孟子ノ良心ハ「コンセンス」ニ当ル。性悪者ハ其「コンセンス」ヲ取ラザルヲ以テ泰西「ロツク」派ノ論ニ類ス。程朱ノ論モ希臘時代ニ之ヲ唱フル者アリ。「ライプニツツ」ノ「モナツド」論モ人ノ善悪ハ本来定マレル者ト云フ見アルガ如シ。中古「プロテナス」ナル者アリ、本来ノ有様ニ帰ヘルコトヲ唱ヘ李氏ノ復性説ニ似タリ。

また、冒頭に近い箇所在中國哲学の時代区分に関して次のような五区分を行つていて、これが後述する井上哲次郎の一八九一〜九二年所講の『支那哲学史』（二松学舎大学図書館所蔵）の時代区分と完全に一致する。⁶

○支那哲学総論

- (1) 伏羲ヨリ東周二至ル「発達ノ世」
- (2) 東周ヨリ秦ニ至ル「思辨ノ世」
- (3) 漢ヨリ唐五代ニ至ル「継述ノ世」
- (4) 宋ヨリ明ニ至ル「調停ノ世」
- (5) 清「考拠ノ世」

したがって前半部分は、私見では井上哲次郎がドイツ留学前に文部省から委嘱されて編纂に従事していた「東洋哲学史」の一部である可能性が高い。

聴講ノートの後半に記された島田が講じた「支那哲学史」の内容は、戦国時代の諸子百家に始まり、漢代経学を説き、隋唐を経て宋学諸家に及ぶもので、「申報」に島田自身が述べる通り、中国の學術思想を人物・書籍に即して説いた通史と呼びうる内容を持つ。講義の年月日と演題は、次の通りである。

- (一八八六年) 二月十日「論孟子政事」、二月十七日「關異端」、二月二十四日「楊朱墨翟・荀子」、四月二十三日「荀子」、四月三十日「道家、老子履歷」、五月五日「老子學術・莊子逍遙遊」、五月二十六日「莊子齊物」、六月二日「列子」、六月九日「道家之撰要細流」
- 十月一日「墨子」、十月八日「晏子・名家・兵家・法家」、十月十四日「管子」、十一月五日「商子」、十一月十二日「申不害・韓非子」、十一月十九日「周ノ大尾」、十一月二十六日「漢以來ノ學術・書・詩」、十二月三日「礼・春秋・論語」、十二月十日「漢初儒者・賈誼」
- (一八八七年) 一月二十一日「董仲舒」、一月二十八日「劉向・劉歆・揚雄」、二月四日「揚雄・後漢鄭玄」、二月十八日「隋ノ王通」、二月二十五日「唐韓退之」、三月四日「宋胡瑗・孫復・周茂叔」、三月十二日「周茂叔」、四月二十二日「周茂叔・二程」、四月二十九日「程明道識仁篇」、五月六日「程伊川」、五月十三日「張載」

数年後、ドイツ留学(一八八四〜九〇)から帰朝して帝大文科大學教授に就任した井上哲次郎は、早くから日本・中国・印度を併せた東洋地域の「東洋哲学」の確立を構想し、「比較宗教及東洋哲学」として、仏教哲学史と中国哲学史を講じた(一八九一〜九七)。井上が帰朝後すぐに講じた「支那哲学史」(一八九一〜九二所講)では、巻一で支那哲学総論と儒学を説き、巻二〜四で道家諸家を丹念に取り上げており、通史としては十分な構成とは言えないが、哲学史の立場から説く井上の「支那哲学史」の講義内容は、中国古典学の立場から説く島田の「支那哲学史」とはかなり異なっていて、特色がある。

その目次は次の通りである。

卷一…○支那哲学総論（支那哲学ノ性質、支那哲学沿革）

○儒学（儒学ノ起源、孔子、子思、孟子、荀子、揚子）

卷二…○道家（老子・老子ノ三学派・道家ノ歴史・道家ノ神話・道家ノ経文・道家ノ批評）

卷三…（道家ノ起源・老子以前ノ道家・鬻子・老萊子・屍子・老子ト列荘トノ間ノ道家・文子・関尹子・黔婁子・元倉子・長廬子・列子・列荘間ノ道家・公子牟子・田子・荘子）

卷四…（鶡冠子・鄭長者・楊子・墨子）

例えば前漢末の揚雄（BC五三～AD一八）についての論及は次の通りで、両者の立場の違いをよく示す。

島田重礼「揚雄学術」

其学浩博ニシテ遠ク歎ニ勝ル。思想ニ富テ口甚吃ナリ。不能激談、唯著述ヲ事トス。活才ニ乏シ。唯本筋通りマジメニ勉強シタルナラン。此点ニテハ第一等ナラン。

漢以後北宋ノ前迄ハ孟荀ノ后ニタツモノト為リ。退之モ孟荀ノ間ニアル歎ト云ヘリ。宋ノ程子初メテ悪シク云ヘリ。曰、漫衍而無断、優柔而不決ト。東坡ハ以艱深之詞文、浅易之説ト云リ。又朱子ハ通鑑綱目ニ、莽大夫揚雄死、逆賊之臣死ト云リ。此ノ如ク揚雄ノ価値大ニ減セリ。必竟其人物ハ不決断ナルナラン。而シ大儒ナリ。法言ノ中、法トナスヘキ者甚タ多シ。又文章家ニシテ言辞ニ富ム。其理論至テ平凡ナルナリ。

太玄経、此ハ雄カ一心ヲ込メタル者ニシテ、易ニ擬セリ。然ルニ古人ハ雄ノ考ノ浅キト文章ノ難解ニ困ミ之ヲ見ス。

独り温公雄ヲ好ミ其註ヲ作り、又其二擬シテ潜虚ヲ作レリ。

井上哲次郎

揚子一家ノ説ハ人性善惡混合説ナリ。揚子ハ大抵孔子ヲ祖述スルノ言多クシテ、自創ノ見少シ。此説ハ孟荀ノ折衷説ナリ。告子モ此説ニ近シ。此説ニ基キ修身學問ヲ説テ曰ク、學問ハ人ノ性ヲ修ムルニ在リ、故ニ其惡性ヲ抑ヘテ善性ヲ養ヒ之レヲ發達セシムベシ。

太玄經ハ專ラ哲學ノ事ノミナラズシテ、易ニ関シテ論ゼリ。揚子ハ絶対ニ信シ居リシニ相違ナシ。玄樞篇ニ、玄ハ万物ヲ遊離シテ形ヲ見サルモノナリ。此玄樞ハ Spinoza ノ万有一体、Kant ノ Ding an sich ノ説ニ同シ。(中略) 玄ハ神ノ魁ナリト云ヘリ。天見サルヲ以テ玄トナス。地形ハレザルヲ以テ玄トス。人ハ心腹ヲ以テ玄トス。故ニ玄ハ万物本体ナリト。揚子哲學ハ Dualism ナルガ如シ。

島田は揚雄の人柄や文章や學術史上の位置について言及するが、井上は揚雄の思想や言説を古代中国や西洋哲學の思想家との比較によって説く。両者の相違は視点の相違であり、必ずしも優劣とは言えない。井上の視点からは諸子百家や宋學などが取り上げやすい一方で、漢代經學などは取り上げにくいことが予想される。島田のほうが対象とする中国學術の展開に沿った形での言及になる反面、それぞれの思想の特色を哲學として分析することはあまりない。

日本儒學史に關して両者が残した著述も、同様に両者の視点の差異を示している。一八九〇年代にはいると、晩年の島田は「支那哲學」の演題を掲げても、しばしば中国と日本を併行して「学案」(學術史)として講じた。⁷⁾ 井上もドイツ滞在中から「日本學」の必要性を提唱し、一八九七年のパリ万国東洋學會で「日本に於ける哲學思想の發達」を講演したのを契機に、江戸期儒學をいわゆる三部作としてまとめた。全体として見て、西洋哲學と比較しながら日中儒教哲學を説く井上の視

点は新しいが、その反面で島田に比して、より教学色も感じられる。

日清・日露両戦間の一九〇〇年（明治三十三年）頃から、日本の中国に対する文化的依存度が急速に低下し、中国に対する相対化が促進し、中国に関する学術研究が緒につくとされる。またこの時期は旧学者が凋落し、帝国大学や高等師範学校に学んだ新世代が研究教育を担いはじめる時期でもある。あまり著述を残さなかった島田の学績は、今日では十分に評価されていないが、島田に学んだ帝大出身者が全国の中等高等教育機関で教鞭を執ることによって、その講壇哲学は全国に広がったと見られ、その影響力は小さくなかった。その後の思想哲学研究の動向を見ると、必ずしも旧学者島田の学的立場が凋落し、新時代の教育を受けた井上のそれが継承されたとも言えないように思われる。島田に学んだ主要な人物は、次のとおりである。

- 安井小太郎（古典科国前）…一高教授
- 島田鈞一（古典科漢後）…一高教授
- 児島猷吉郎（古典科漢後）…五高教授
- 岡田正之（古典科漢後）…学習院教授・兼東京帝大助教
- 服部宇之吉（1890 哲）…東京帝大教授（支那哲）
- 松本文三郎（1893 哲）…京都帝大教授（印哲）
- 狩野直喜（1895 漢）…京都帝大教授（支那学）
- 藤田豊八（1895 漢）…台北帝大教授（東洋史）
- 桑原隲蔵（1896 漢）…京都帝大教授（東洋史）
- 白河次郎（1897 漢）…記者・議員、早大講師

松山直蔵 (1897 漢) … 懷徳堂教授

高瀬武次郎 (1898 漢) … 京都帝大教授 (支那哲)

中でも後世への影響力が大きかった点では服部宇之吉と狩野直喜を挙げるべきであろう。『東洋倫理綱要』『孔子教大義』等の教学的な著作で知られる服部宇之吉であるが、東京帝大の講義では度々「目録学」を取り上げている。最も早期の一八九九年高等師範学校における所講『目録学』（柿村重松筆記による聴講ノートが現存、筆者架蔵）は、この前年に歿した島田直伝のものと違って差し支えない。⁸しかし服部の場合にはもはや「東洋哲学」「支那哲学」の名のもとに日本儒学・日本漢学を講ずることはない。漢学科（一八九九）が支那哲学・支那史学・支那文学語学に分化して以降、一教官が中国と日本の哲学史を併講することはなくなり、例えば服部宇之吉は島田の古典学を受けた目録学等と教学的な東洋倫理等を併講し、新たに日本漢文学が岡田正之（国文学科では芳賀矢一）によって講じられるのである。⁹そして日本儒学は講じられることなく、それは大正期の日本思想史学の登場を俟たねばならない。

狩野直喜の『中国哲学史』は、哲学史と称するが学術史の色彩が濃厚で、基本的には島田の「学案」のスタンスを継承するものと言える。しかしながら、具体的な記述について見れば、例えば前述した揚雄に関する言及などでは、島田よりも井上の記述に近い箇所も見られる。

五、中等教育における国語・漢文

次に、大学の高等教育における学科とは別の推移をたどった、中等教育（中学校）における学科（教科）に即して、漢学・漢文の推移を見ておきたい。

三島毅は漢学塾二松学舎の開塾に当たって、「漢学」の目的を「一世有用ノ人物トナルニ在」りと言い、「有用ノ学ニ志スモノハ、洋籍モ亦兼学ハサル可ラス。故ニ漢学ノ課ヲ簡易ニシ、洋籍ヲ学フノ余地ヲ留ルノミ」(「漢学大意」¹⁰)と明言した。二松学舎に限らず、上述した東京大学文学部・法学部でも、三島毅ら旧学者の漢文講読(漢文学)と漢作文による漢学の目的は、論理的分析的な思考力や漢字漢語の語彙力を伴う作文能力の養成にあつたと考えられる。¹¹ 学生も西洋語の理解にも役だったと回顧している。西洋語を習得して洋学を学ぶ階梯として、漢学が重要視されているのであり、漢学は洋学と全く矛盾するものではなかつたのである。

それらは本来、大学における高等教育の内容と言うよりも、中等教育課程における課題というべきであるが、中等教育機関が未発達なためにそれを補う役割を担った漢学塾などの私塾においてそれが代替され、また大学の課程に入っても引き続き行われていたものと見ることが出来る。中村正直もまた、一八八三年に「古典講習科乙部開設ニ就キ感アリ書シテ生徒ニ示ス」という文章を著して、漢文の効用を次のように述べている。

方今洋学ヲ以テ名家ト称セラル、者ヲ觀ルニ、元來漢学ノ質地有リテ、洋学ヲ活用スルニ非ザル者ナシ。漢学ノ素ナキ者ハ、或ハ七八年、或ハ十余年、西洋ニ留学シ帰国スルノ後ト雖モ、頭角ノ嶄然タルヲアラハサズ。ソノ運用ノ力乏シク、殊ニ翻訳ニ至リテハ決シテ手ヲ下ス能ハザルナリ。

その後の近代教育の形成過程で、こうした基礎学としての「漢学」はその座を譲って、急速に凋落していく。初等・中等教育においては新たに「国語」が創成されることになる。また、大学の高等教育においては、既にみた通り漢学科時代の中国・日本の併講を経て、学問分野の専門分化にもなって次第に日本と中国の分離が促進され、日本学において漢文は文芸としての「漢詩文」を除いては対象化されにくくなっていく。

しかしながら「漢文」が教育現場から一掃されることは遂になかった。むしろ「国語」教科の形成にともない、「国語及び漢文」として国語の一翼を担う形で中等教育の中に位置づけを得て、言語（国語の材料としての漢字）と道德（道德教材としての儒教思想）に関する教学として再編され、国民一般に広く浸透したと言える。

教科の形成に即してたどってみよう。大学の学科目に先んじて、一八九一年から尋常中学校の学科（教科）名として歴史教科が国史・東洋史・西洋史に分科したことはよく知られているが、「国語」の名称もまた大学の学科名称である国語国文学科（一八八九年）に先んじて一八八六年に尋常中学校の学科名として始まっている。その後、小学校の教科名が「読書」「習字」から「国語」となり、初等・中等教育課程における一貫した「国語」教科が完成するのは、漸く一九〇〇年のことである。後発の中学校が、むしろ後進ゆえに大学等に比べて新しい学科目を定め得た面があったのではないだろうか。

一八八六年は教育制度史上の画期であるが、この時期、帝大への改組によって不遇感・危機感を抱いた古典講習科の生徒・卒業生たちは、一八八六年一月に「東洋学会」という学会を発足し、同年十二月より月刊誌『東洋学会雑誌』を発行した。学会創設の首唱者である市村瓊次郎は、会の目的として「日本支那及印度等ノ事物ヲ尋繹シ博ク学理ヲ研究スル」ことを掲げている。

こうした動きに対して、請われて同会の会長に就任した西村茂樹は、「東洋学会ノ前途」（二編七号・一八八八年六月）や「日本の文学」（二編九号・一八八八年八月、二編十一号・一八八八年十一月）等を講じて、東洋学会の進むべき目的を示し、併せて古典講習科卒業生の進路について示唆した。前者において西村は、学問研究には次の三通りありとする。

- ① 東西兼通（政治・経済・道德・心理・理学・意法等）
 - ② 西洋ノ学ニ依リテ東洋ノ事実ヲ知ル（格物・化学・地理・地質・博物等）
 - ③ 東洋ノ学問ノミ（自国ノ歴史・言語・文章・制度・風俗・詩歌）
- そして、③こそが古典講習科生の取り組むべき方向（会員諸賢ガ最モ其所長ヲ顕ハスベキ所）であるとす。帝国大学卒

業時に学士の学位を授与されなかつた古典講習科生に対して敢えて「東洋ノ学士タルニ恥ズ」と慰撫しつつも、これからの東洋学は単に東洋だけで通用する学問であつてはならず、従来の東洋学の欠点を補つて「書籍ノミニ頼ラスシテ事実ヲ探討」し、「東西ノ学問ヲ精密ニ比較」する、「西洋ノ学士」に対抗しうる研究方法を備えなければならぬことを論じた。¹²⁾

後者では、目下「日本の文学」には帝国大学文科大学で行つてゐる「文学」（学術研究）とは別の問題があると前置きし、現今日本で行われている学術のうち、このまま順調に進歩していくことが見込まれる理科系分野（物理学・化学・数学・天文学・器械学・土木学）と、このままでは順調な進歩が疑われる人文社会系分野（文学・字学・画学・道徳学・実用経済学）があると述べる。その上で、日本語・日本文の改良について、①文字、②語辞、③文章、④詩歌に分けて意見を述べる。①文字については、ひらがな・カタカナと通常使用する約三〇〇〇字の漢字を標準とすべきことを説く。②語辞については、漢文訓読語・翻訳後等による乱れを矯正すべきことを説く。③文章については、言文一致論が実用に適さないことを述べ、現行の六種の文体（擬古文・漢文・漢文訓読体・翻訳体・通俗文・書簡文）について論評し、また日本文を中国文・西洋文と比較してその得失を論ずる。西村の主張は、文章の格が時代を下るにしたがつて低下したとする世評に反対し、「論説の文に至りては、此十年以来の文章は、大に進歩して、邦文にて古来未曾有の域に達」したとする。そして言文一致論等の日本文改良論はそれぞれ一理あるが、「兎も角も日本の文章の位格、力量」の向上が先決であり、そのために日本・中国・西洋の言語文章に通じた文章家の出現が期待されるとする。

「東洋学会ノ前途」「日本の文学」ともに西村の主張は西洋の学問・文章を十分に学ぶことによつて日本の学問・文章を改良するという点で共通している。明言はしていないが、帝大で行う文学とは異なる方面と言つてゐることから、古典講習科生の進むべき方向として、大学における学術研究とは異なる、実用的かつ品格ある日本文の改良や、同時期に始まる中等教育における「国語」教科への貢献などが期待されているものと思われる。

一方、「修身」が初等・中等教育における筆頭教科になるのは、「国語」よりもさらに早く、一八八一年のことである。一

八九〇年には教育勅語によって儒教倫理が国民教育に基礎づけられる。小学校では「道德教育及国民教育ノ基礎」が普通教科に優先するようになった。中学校でも漢文は「国語」の一翼として主客の分を超えない限りにおいて重視された。教育勅語の制定に携わった井上毅は、「漢文教育」の意義について極めて明確に、今は国語国文を振興すべきであり、書記言語としての「漢文ハハヤ死物」であるから、漢作文の教育は不必要である。当今において漢文教育は、まず第一に「支那の経学（近時の語にて哲学）は道德の為に必要」であり、第二に「支那の文字は国語の材料として必要」であると述べている（一八九四年「漢文意見」）。

三島毅に即してみても、幕末の備中松山藩での私塾虎口溪舎時代から明治十年の二松学舎開塾を通じて陽明学を説くことは殆どなかったが、教育勅語が發布された年に、主に青少年に向けた講演「陽明四句訣略解」（一八九〇年五月十九日）を行い、王陽明の「四句訣」を「道德に入るの簡易方」として、陽明学を奨励しているのが注目される。そして、一八九〇年代の課程表には、最上級の課本に『伝習録』が入るようになった。これも漢学が明治前期における基礎学としての意義を失って、明治中期以降には道德教育の材料として傾斜していったことの、一例証と言える。

その後、教科書疑獄事件（一九〇二年）が引金となって、初等中等教育における教科書は従来の検定制（一八八六―一九〇三年）から国定制（一九〇三―四五年）に変更され、教育内容への統制が強まった。一九〇〇年には国語調査委員会が発足し（一九〇二年に官制）、文部省は漢文教科の削減・廃止の方針を打ち出すが、民間諸団体や私学に拠った漢学者が抵抗運動を展開し、さらに大正年間の漢学復興へのうねりへとつながる。

六、まとめ

以上、本論では幕末明治期の近代化過程における漢学の動向を、人物と学校制度・教育制度に着目することによって素描

しようを試みた。

幕府教学の中心にあつた昌平坂学問所では、幕末期（一八六二年以降）すでに朱子学による初等教育と、朱子学以外の折衷学・考証学による高等教育へと分化する動きがあつた可能性がある。

ついで一八六八〜七七年（明治元〜十年）、教育機関が幕府から新政府へと移行する過程で、和漢学と洋学は明暗を分け、一八七二年発布の「学制」の規程では「文」の学びが公的な高等教育（大学）の中から脱落し、一八七七年の東京大学文学部の創設は断絶した「文」の復活と一応は見ることができると言える。

その文学部における一八八〇〜八五年の卒業生四十七人のうち、政治学理財学科生が八〇パーセントを占め、和漢文学科は殆ど卒業生を出さなかつた。一八八二〜八八年に臨時的に設置された古典講習科は一時、多くの教官と生徒を集めたが、一八八六年の帝国大学への改組によつて打撃をうけ、教官の多くが免職となり、生徒にも少なからぬ退学者が出た。この過程は国家に須要な高等教育の内容の淘汰と見ることができると思われ、法制史（小中村清矩）、考証学（島田重礼）、実証史学（内藤耻叟）、国文法（物集高見）など、旧来の学問の中で実証性の高いものだけが採用されたと言える。

東京大学から帝国大学への移行の時期に、既に和漢文学は旧幕時代の国学・漢学とは変質し、島田重礼や井上哲次郎は従来型の講読とは異なる「支那哲学史」を講義していた。そしてほぼ同時期に、同じく「支那哲学史」と題して講義しながら、両者の講義の間にはかなりの開きがみられる。清朝漢学の影響を受けた大田錦城・海保漁村の学統を承ける島田が「古典学」の立場から講義するのに対して、東京大学卒業の井上は「哲学史」の立場から講義している。しかもその後の思想哲学研究の動向を見ると、必ずしも旧世代の島田の学的立場が早く凋落し、新世代の井上のそれが継承されたとも言いきれない。また、島田と井上の立場の相違にもかかわらず、両者が日本と中国の哲学思想を一人で併せ講じた点は共通し、次世代の学者たちには次第に見られなくなる傾向である。ここにも日本儒学・日本漢学が学的対象から脱落するに至つた一因がある。

他方、大学の高等教育における学科とは別の推移をたどつた中学の中等教育において、江戸時代から引き続き明治前期ま

で、漢文によって論理的分析的な思考力や漢字漢語の語彙力を身につける「漢学」は、西洋語によって習得する「洋学」の基礎としての役割を担った。その後、新たに「国語」が創成されると、「漢学」は基礎学としての座を譲り、「国語」の一翼を担う「漢文」の形で中等教育の中に位置づけを得て、言語と道德に関する教学として再編され、国民一般に広く浸透した。

注

(1) 武士階級以外から藩儒に登用された例は恐らく非常に多いと予想される。昌平坂学問所の儒者を見ても、早く寛政度の尾藤二洲や頼春水、文久度の芳野金陵は豪商・豪農階級の出身である。山田方谷や三島中洲は備中の庄屋の出身であるが、備中松山藩から遊学費を支給されて江戸に遊学するが、その遊学費支給は制度化されたものであった。

(2) 実務には中村敬宇・塩谷實山が当たることとして提案されたが許可されず、後に金陵はこの事業に着手するために紅葉山文庫書物掛への転任を希望したとも言われる。

(3) 島田の東京大学における対象学生・講義題目およびその授業内容は、以下の通りである。

○明治十二年九月～十三年七月

・文学部第二科三年生「漢文学」、法文学一年生「漢文学」

○明治十三年九月～十四年七月

・文学部四年生四年生「漢文学」(週二時間)『詩経』講授、『書経』輪講

・文学部第二科四年生「漢文学」(週四時間)『周易』講授、『韓非子』輪講

・法文学一年生「漢文学」(週四時間)『史記』輪講、(正課外)『文章軌範』講授

○明治十四年九月～十五年七月

・哲学三年生「支那哲学」(週二時間)『孟子』『老子』『荀子』講授

・文学二年生「漢文学」(週一時間)『論語』講授、(週一時間)『古今学変』講述、(週四時間)『八大家文読本』輪読質疑

・和漢文学二年生「漢文学」(週二時間)『漢書』質疑

○明治十五年九月～十六年七月

・和漢文学三年生「支那哲学」(週四時間)『論語』朱注・『大学』朱注・『中庸』朱注・『荘子』郭注・『左伝』杜注講授

・和漢文学二年生「漢文学」(週六時間)『八大家文読本』輪読質疑

・和漢文学一年生「漢文学」(週一時間)『孟子』朱注講授

・古典講習科乙部一期生「経学史学」(週三時間)『周礼』鄭賈注疏講義のち輪講、(二時間)第一期『大学』・第二期『中庸』輪講、(三

時間)『左伝』質疑

○明治十六年九月～十七年七月

・和漢文学四年生「支那哲学」：(週二時間)『周礼』講授

・哲学四年生「支那哲学」：(週二時間)『莊子』講授

・古典講習科漢書課三・四期生「経学史学」：『周礼』輪講、『左伝』質疑、『書経』輪講

○明治十七年九月～十八年七月

・和漢文学三年生「支那哲学」

・和漢文学一年生「漢文学」

・哲学三年生「支那哲学」

・古典講習科漢書課三年生「経学史学」

・古典講習科漢書課一年生「史学」

○明治十八年九月～十九年六月

・哲学四年生和文学四年生撰科生：(転出した中村正直を継承)『周易』講授

・哲学三年生：「漢魏以来諸儒の説・孔門諸弟子学派の源流・諸子学術の異同」口授

・和文学二年生：『周礼』講授

・和文学一年生：『孟子』輪講

・古典講習科漢書課四年生：『書経』蔡伝・『周礼』鄭注輪講、『資治通鑑』質疑、『儀礼』鄭注講授、『韓非子』輪講

・古典講習科漢書課二年生：『左伝』輪講、『詩経』毛伝輪講・『周礼』鄭注講義・『資治通鑑』質疑

(4) 明治十五年九月以降に開設された古典講習科漢書課学生向けの「経学史学」は、中国古典の専門家養成を期待して設けられただけに、『周礼』『儀礼』注疏の講義・輪読等、難易度の高い教材を使用している。また、当該期間において漢籍以外の教材で唯一、伊藤東涯『古今学変』の講述を行っているのが(一八八一年九月～八二年七月)、後の哲学史講義に繋がる可能性があるものとして注目される。

一八八六年九月から八七年七月の学年：「支那哲学の大意(諸子～両漢学術の概略・魏晉～明清諸儒の学流)」(哲三)、「支那制度の大略(『文献通考詳説』)」(和二)。

一八八七年九月から八八年七月の学年：「漢以後諸儒学術の源流異同」「本朝諸授の学流」(哲三)、「漢土文字の起原沿革・音韻の概略・詩文の源流・史学の要領」(和三)、「宋儒の学案」(哲二)、「宋儒の学案」「諸子学術の要領」(和二)。

一八八八年九月から八九年七月の学年：「清朝諸儒の学案」「本朝儒学の源流沿革」(哲三・和三・史三)、「漢土古代歴史・古代法制」(和二・撰)、「漢土歴代諸儒学案」(哲一・撰)。

(5) 支那学宗派異同ヲ論シタル書可有之、タトヘハ老子ハ何、莊子ハ何、韓非ハ何、荀子ハ何、漢儒ハ何、宋儒ハ何ヲ主トス。其内ニモ程

朱陸王ノ違ト申様の類、ナル丈ケ細密ニ説候書ハ何ト申もの可有之哉。御教指願上候。もし細密ニ説キタルもの無之候ハ、ザツトシタルものニテモ宜御座候。右類の書御所蔵ニも候ハ、寸時拝借願上候。御存被下候通、小子固陋寡聞、行当候事とも有之、汗背之至ニ御座候。(一八八五年もしくは一八八六年九月二十四日付、三島中洲宛南摩綱紀書簡、二松学舎大学所蔵)

- (6) 『支那哲学史』巻一に、「支那哲学沿革」として次の五期に区分している。
- 一 発達ノ世 開闢ヨリ東周ノ平王マテ、即チ紀元前八百年マテ
 - 二 思辨ノ世 東周平王ヨリ秦マテ、即チ紀元前二百三年迄
 - 三 継述ノ世 西漢ヨリ五代ノ末マテ、即チ紀元後九百五十九年マテ
 - 四 調停ノ世 宋ヨリ明マテ、即チ紀元後千六百六十一年マテ
 - 五 考掘ノ世 清初ヨリ今日ニ至ル

なお、「調停ノ世」とは、宋学の「釈老ノ長所ニヨツテ儒ノ短所ヲ調停」した学問をさす。

- (7) 管見の限りでは、一八九六〜九七年所講の『周末諸子学案』と『日本諸儒学案』(上代から江戸初期まで、羽鳥又次郎筆記、筆者架蔵)「一八九七〜九八年所講の『経書解題』と『日本学案』(上代から江戸初期まで、金沢大学図書館所蔵の駒井徳太郎筆記による)などがある。
- (8) 服部宇之吉の『目録学』は、従来、「目録学概説」(慶応義塾望月基金支那研究会編『支那研究』岩波書店、一九三〇)が知られるのみである。他に刊行準備を進めていた遺稿があったが、戦災によって焼失した。柿村筆記にかかる『目録学』の巻頭に、「目録学ハ學術ノ分流、又ハ其分科ヲ明ニスルヲ以テ標的トスルモノナリ」とその目的を明確に示している。
- (9) 必ずしも東京帝大での講義に限定せず、服部門下から日本漢文学を専攻したものを拾えば、高等師範学校時代の学生から柿村重松が出ている。
- (10) 「漢学大意」は明治十年の二松学舎開塾時に三島毅によって書かれた文章と考えられるが、現存する最古の資料としては、一八七九年の「二松学舎舎則」(国立国会図書館所蔵)所収のものである。
- (11) 例えば山田準は、三島中洲の講義を次のように評している。「(三島中洲)先生の文章規範講義は大主意を摘出し、大段小段節を分け、是亦主意を説明し、字眼文脈等それはそれは条文縷析微に入り細を穿つた講義振りであつた」(『二松学舎六十年史要』)。中洲の講義ぶりは経書でもほぼ同様であつたらしく、哲学思想としてよりも、「文」として解説したらしい。
- (12) 「諸賢ノ腦中、西洋ノ學術ノ博大精密ナル者アリ日々進歩シテ止マザル者アリトイフコトヲ忘ル、コトナク、東洋ノ一隅ニ僻在シテ自ラ甘ンスルコト無カラシムコトヲ希フ」という一文も、西村の主張をよく示している。
- (13) 三島毅が学生に対して陽明学を稀にしか説かなかつたことは、当時の塾生の回想にもあり、また明治十年代の二松学舎の課程にも陽明学関係の書籍が見えないことからわかる。陽明学を説くことが稀であつたのは三島の師山田方谷ゆずりとも言え、方谷は陽明学学習希望者にだけ随時『古本大学』を講じたと伝えられる。

【キーワード】

・教育制度 ・東京大学 ・島田重礼 ・井上哲次郎 ・三島毅